

ウェールズの幽霊たち

松 本 達 郎

ウェールズに他の国より幽霊が多いわけではない。ウェールズの幽霊の出方に「ケルト的な」特徴があるわけでもない。幽霊の背景には歴史や民俗について勉強させられる事が多いので、拾った話を書き留めてファイルしておき、この『英語研究』のずっと若い号で小出しに紹介した事もある。ファイルを見たある知人が面白いからと出版社に持ち込んだが、こんな誰も知らない人名と誰も知らない地名ばかりの本は売れないと断られ、押し入れの中で数十年眠らせた。いつまでも中有に迷わせておくのが可哀想になり、私自身が死ぬ前に、少しは面白そうな幽霊を娑婆に顔見世させたいと、ウェールズ巡りの形でこれを書いてみた。

＊

イングランドからウェールズに入る最も標準的な道筋は、セヴァン川がブリストル海峡と名を変える少し手前で、前世期の半ばに当時の技術の最先端を尽くして完成した、長さ二キロ足らずの吊り橋を渡る。橋の兩岸に見えるのは、これも二十世紀後半に乱立した銀灰色の石油精錬工場がストーンヘンジならぬメタルヘンジの趣で立ちはだかる、至ってありふれた「地方」の風景で、『マビノギオン』や『ウェールズ四古書』の国に近付いたという雰囲気は感じられない。セヴァン川の水はまだ汚染されていず、広々とした青白い川面には鴉の群れが浮かんでいて、彼らがいつまでここに、そしてこの地球に安住できるだろうという感傷が心をよぎる。そしてこのセヴァン川には、確かにまだ昔ながらの ― ひどく昔ながらの ― 幽霊が出るという話が観光案内パンフレットに書いてある。夜更け、とりわけ霧の深い真夜中に、セヴァンの河口の水面には、

深い悲しみを湛えた蒼白な顔の白衣の美女が、泳ぐともなく漂っているという話で、訳知りの人はこの美女をハブレン（Habren）の幽霊と呼ぶと添えてある。

ハブレンという名前の由来を辿るなら、十二世紀に出た『ブリテン王統紀』（*Historia Regum Britanniae*）にまで遡る。マンマスの僧ジェフリー（Geoffrey of Monmouth）が書いた歴史書で、アーサー王もリア王も全て実在した人物として書かれ、彼らの先祖は炎上するトロイを脱出しローマを建国したアイネイアスの孫ブルートゥスだとされる。ブリタニアはブルートゥスの国だからそう呼ばれる。

このブルートゥスには三人の息子がおり、父の死後はブリタニアを三つに分け、長男は今のイングランドに当たる東南部、次男は今のウェールズを中心にした西南部、三男は今のスコットランドに当たる北部をそれぞれ相続した。兄弟仲は至って良く、平穏無事にめいめいの国を治めていたのだが、ある日スコットランドからイングランド王の許に恐ろしい報せがもたらされた。ヨーロッパ大陸を荒らし回っていた獐猛なフン族の王ハンバーが、大軍を率いてスコットランドに押し渡し、防戦に努めたスコットランド王はあえなく敗死して、無数の難民が雪崩を打って南へと逃げ走っているという。イングランド王は直ちに国中の壮丁たちを召集するとともに、弟のウェールズ王に急使を送って援軍を求め、陣容が整うと自ら軍を率いて北上し、すでに国境を南に越えてイングランド中央部を蹂躪しているフン族を迎え撃った。イングランド王の軍勢は首尾よくフン族を撃ち破り、フン族のハンバー王は北へと逃げ走る道筋で北海にそそぐ大河で溺れ死に、その川はハンバー川と呼ばれることになった。

敗走するフン族が仲間の死体とともに戦場に残した財宝は、戦利品としてイングランドの戦士たちの間で分配された。王の取り分の中には、ハンバー王が大陸から拉致して来たゲルマンの王女エストリルディスがいた。「磨き抜かれた象牙より、降ったばかりの新雪より、白百合の白さより白い肌の」ゲルマン王女の美貌にイングランド王は心を奪われた。王は王女に恋を打ち明け、王女の心もそれに応えた。王は彼女を妃に迎えるために必要な手筈を整え始めた。

ところがここで邪魔が入る。イングランド王の亡父はブリタニアに国名を与えたブルートゥスだが、その片腕となって建国に貢献したコーンウォール公爵コルネリウスという古強者がまだ矍鑠としていて、今のイングランド王はまだ幼かった頃、公爵の娘グウェンドレンと婚約していたと主張する。王の宮殿に

乗り込んだ公爵は、歴戦の血を吸って黒光りする戦斧の柄をこれ見よがしに床に打ち付けながら王を難詰した。「王よ、貴殿の父君と艱難を共にして、この身に受けたあまたの傷の跡をとくと御覧あれ。その報償がこの違約とは何たる仕打ち。我と我が娘に恥辱を与え、夷狄の女子を妃にするとは法外も極みでござろうぞ。」

という訳で王はやむなく公爵の娘と結婚し、やがて二人の間には王子も生まれた。それでも王はやはりゲルマンの王女を捨てきれず、ロンドン市中のとある場所に秘密の地下室を作って彼女をかくまい、「家の守護神に捧げ物をしに行くが、他人に見られると霊験がない」という口実で、王妃の目を盗んで七年の間忍び通いを続けた。

その七年目に煙たくてたまらぬ義父コーンウォール公爵が死ぬと、王は妃グウェンドレンをあっさり離別し、日陰の身のゲルマン王女エストリルディスと正式に結婚した。元の王妃グウェンドレンが怒るのは当然で、直ちにコーンウォールの実家に戻り、イングランドで受けた恥辱を訴えて国中の男どもの義憤を呼び起こし、大軍を募って前夫イングランド王に復讐の戦を仕掛けた。イングランド王も仕方なく軍を進めて迎え撃ったが兵たちの士気がさっぱり上がらず、一度の合戦で王は矢を受けてあっさり死んでしまった。グウェンドレンは単身でイングランド王女に返り咲き、何よりも先に憎くてたまらぬゲルマン王女エストリルディスと、彼女と王の間に生まれた幼女ハブレンを引捕らえ、今日セヴァンと呼ばれている大河に母子ともども投げ込んで溺死させた。グウェンドレンが示した唯一の温情らしい行いは、かりそめにも夫と呼んだ王の娘であり、イングランドの王女であった子供に罪はないと感じたのだろうか、その子が溺死した川を、末永くハブレンの川と呼ぶように布令した事だった。

ウェールズ語では今もセヴァン川をハブレン川と呼んでいる。「セヴァン」(Severn)と「ハブレン」(Habren)はどちらもローマン・ブリテン時代にラテン語で呼ばれた川の名の「サブリナ」(Sabrina)が訛ったもので、英語で元のbがvに変わり、ウェールズ語で元のsがhに変わるのは珍しいことではない。それは別として、上の話だと王女ハブレンが溺れ死んだ時の年齢は、多く見積もっても七歳で、セヴァンに浮かぶ幽霊の描写にはそぐわない。エストリルディス自身が幼い我が子を救おうとしてか、その亡骸を探し求めてか、もう三千年近くもセヴァンの川面をさ迷い続けていると想像した方が、余計なおせっかいには違いないが腑に落ちる。

幽霊話とは関係がないが、ミルトンは『コーマス』の中で川の女神サブリナを登場させている。時のウェールズ長官がパトロンになった芝居だから当然の事だろう。

*

セヴァンの吊り橋を渡ってウェールズに入ると間もなく、ほんの少し下手でセヴァン川に合流するワイ川が流れ、その水面からそそり立つ絶壁の上に、チェプストウの古城がある。実戦向きの中世の城をあまり見た事がない人を案内すると大いに感動して貰える場所だが、幽霊が出る話は、あるに違いないと思うけれど、まだ聞かない。ここからワイ川を五キロほど遡った所に、昔はワーズワースに歌われた事で有名だったティンタンの修道院がある。十六世紀なかばに宗教改革を起したヘンリー八世が、カトリックの勢力を根絶し、合わせて自分の財布を膨らますために、修道院の閉鎖を命令してその財物を没収し、鐘や聖具など一切の金属製品を鋳潰して、屋根に張った鉛まで剥ぎ取った。周辺で農業や牧畜を生業にしていた人々は、かつては修道僧たちを敬愛していたが、この頃では彼らのかけ離れた富裕と税の取り立てにうんざりし、修道院閉鎖を悲しむ気にもならなかった。建物が無人になると、人々はてんでに石壁を少しずつ壊し、畑地や牧場の垣を作る足しにした。石壁には蔦が生えて漆喰が崩れ、床だった所は草に覆われて雛菊の花が咲き、ティンタンはワーズワースにスコラ哲学の神ではなく、自然の調和を教える場所になった。

ティンタン廃院の高窓の一つは中秋の満月をまともに受ける位置にある。その満月の一夜に限って、月明かりが在りし日の回廊の跡を照らす時、シトー派の白い衣を着た修道僧たちの幽霊が物思わし気に歩く姿が見えるという。物好きな観光客がその夜その時まで頑張って運良く幽霊たちに出くわすと、彼らは何故こんな異様な風体の人間が紛れ込んだかと訝るように一瞬瞳を凝らしてから、何事も神の御意思だと言わんばかりに首を振り、黙って散策に戻って行くという。だがティンタンの白い修道僧たちに、修道院が潰れて数百年もの後までもこの地に留まる妄執があったのだろうか。この話には何となくヴィクトリア朝末期の感傷的な旅行者の夢に過ぎないという趣がある。

もっとヴィクトリア朝の匂いの強い実話がある。イングランドとウェールズの境をなすオフアの土塁に近いティンタンの地は、ノルマン王朝時代の十二世

紀には、土着のウェールズ人諸侯とその領地を奪おうとするノルマン貴族との絶えざる合戦の場の一つだった。それにまつわる幽霊の話が『ハリファクス卿の幽霊録』(*Lord Halifax's Ghost Book*)に記されている。幽霊が本当に怖くてたまらないので怖いもの見たさに各地の幽霊屋敷を訪ねて廻る一方、大勢の人々から幽霊体験の報告を蒐集して記録したハリファクス侯爵アーチボールド・キャンベルは1913年に亡くなったが、息子アーガイル公爵の代の1936-7年に遺稿が整理出版されてその道の権威書になった。スコットランドやイングランドの幽霊談ばかりの中に、一つだけウェールズのティンタンに触れた話がある。

十九世紀末のとある春の日、ワイ川沿いを自転車旅行していたE・Bという紳士とその妻がティンタンにさしかかって宿をとり、ここで二泊しようということになった。E・B夫人には自動筆記(*automatic writing*)の能力があったが、本人はそれで自分が書いたものなど信用せず、自分の怪しげな能力は努めて隠しておきたがった。自転車と自動筆記は当時の最先端の流行で、H.G. ウェルズの未来都市には自転車の群れが行き交うし、W.B. イェイツの想像力は妻の自動筆記に大いに助けられていた。

宿に落ち着いたE・B夫妻は夕食後ティンタンの廃院を見物し、型通りにその神秘的な美観に打たれていた。その時ふと妻の様子がおかしいのに気付いたE・B氏が、霊界から誰かが呼ぶのかと訊ねると、どうやらそうらしいとの答えなので、二人が石壁の崩れに腰を下ろすとたちまちE・B夫人右手の人差指が本人の意思とは無関係に動き出し、物言いたげに膝を叩き始めた。そこで夫が霊に向かって「君が我々と交信したいなら、イエスの時は三回、ノーの時は一回叩き給え。了解かね」と言うと、夫人の指は直ちに自分の膝を三度叩いた。モールス信号もまた十九世紀のモダンな発明だった。

幽霊との交信には時間がかかる。アルファベットをA.B.C…と一文字ずつ順番に唱えて行き、幽霊がイエスと打った所でその一文字を書き留めて、同じ作業を繰り返す。これで文章を作って行くのだから、並の忍耐力ではかなわない。だが当時の英語世界ではこれが最も広く行われた霊界との交信方法だった。幽霊が大昔の人物で、チョーサーの英語やフロワサールのフランス語、アナイリンのウェールズ語などを書いてよこしたらどうするのだろうと気になるし、E・B夫妻に古代中世の言語を解釈する素養があった筈もないのだが、とにかく彼らが受け取った通信は、十二世紀に死んだ人物の幽霊からの物だった。

幽霊は自己紹介をして自分はヘンリー二世王の旗下で戦ったサクソン人の兵士だと言う。E・B氏はあまり歴史に詳しい方ではなかったので、「サクソン人のくせにノルマンの王の許で戦ったのか」と尋ねると、幽霊は「決して嘘はつかないから信じて欲しい」と答えた。この兵士はティンタンの修道院近くで戦死して、お祈りの一つも唱えて貰えないままこのあたりに埋められたのだという。そして自分は別にすぐれて善人でも悪人でもなかったから、今のまま幽霊としてこの辺りをふらついていても苦情があるわけではないが、もし誰かが自分のためにミサを挙げてくれればこの上なく嬉しいのだがと言う。E・B氏が、自分たちの教会は英国国教会でヘンリー二世の時代には存在しなかった宗派だし、国教会には死者のための特別の祈祷がないと伝えると、幽霊は、「宗派などにはこだわらない。ただ私のためという名目でミサが挙げられれば満足する」ということだった。E・B氏がそれならばと、ミサが挙げられるよう取り計らう事を約束すると幽霊は喜んで礼を述べ、夫人の右手は動かなくなった。

その翌朝E・B氏は知り合いの司祭に手紙を書き、事の次第を説明して、どこかの教会で無名の死者に捧げるミサを挙げて貰えるよう依頼した。それから再び夫妻で廃院をとっくりと見物して歩いたが、昼間には何事も起こらなかった。それで念のためにと、昨日と同じ時刻にもう一度同じ場所を訪れると、夫人の身に全く同じ現象が起こり、幽霊が「ご配慮に感謝します」と言ってきた。他に何か言い残したことはと訊くと、「もしミサを二度挙げて頂ければ最高だが、貴方にこれ以上の御迷惑をかけるには忍びない」という事だった。

E・B氏はロンドンに帰ると、例の司祭に再度のミサを依頼した後、歴史書を買って読んで幽霊についての史実を調べてみた。どの本にもティンタンあたりの小競り合いまでは記されてなかったが、ヘンリー二世の時代には、王が最も信頼を寄せるのはサクソン人の兵士たちで、王家とノルマン辺境伯らとの争いに、王の忠実な臣下として働いたことが確かめられた。ヘンリー二世はノルマンの血こそ引いていたが、イングランド王になりきっていた。

ティンタンでの出来事から十年ほど経って、E・B氏夫妻は自宅の夕食会に、当時霊媒として名高かった二人の女性を含む五人の客を招いた。晩餐の後、赤々と燃える暖炉の火が綺麗なので、灯りを消して一同で見とれていると、突然テーブルが宙に浮かんで傾き出し、しかるべき手順に従ってE・B夫人の指は「ミサを深謝」と打ち出した。これが行われている間、霊媒の女性二人はE・B夫人の背後にありありと、古風な灰色の衣服に身を包み、顎鬚をはやし

た容姿端麗な壮年の偉丈夫を見たという。

*

ティンタンから西南に四十キロほど鳥が飛ぶと、ウェールズの首都カーディフに着く。国際色豊かな港湾都市という混血児の顔に、頑張ってウェールズらしさを誇示する化粧を施した中規模の都市だが、名所案内をやっていると近頃では日々に変化が起って剣呑だからすぐ本題に入るとする。カーディフには白い貴婦人の幽霊が出る。

カーディフの中心部を東西に走る大通りは、東から順に、歩行者天国のある商店街クイーン・ストリート、カーディフ城に沿ったデユーク・ストリート、タフ川を渡る橋に向かうカースル・ストリートと名前を変える。首都一番の盛り場で、催し物のある日には一段と人々が雑踏する。そんな賑やかさが静まる夜更け、クイーン・ストリートのどこからか、白い古風な衣装をまとった上品な女が現れて漂うように西へ進み、デユーク・ストリートの城の前で歩みをためらい、カースル・ストリートをタフ橋の袂まで来ると、城の塔を振り返って二三次かすかに手招きのような仕草をして消える。彼女が何者なのかは誰も知らないが、実際に見たという人は結構いる。少し歴史に詳しい向き中には、この幽霊が昔カーディフ城に幽閉されていた悲運の王子ロベール・クルトユーズにゆかりの者だと言う人々がいる。

ロベール・クルトユーズ（短袴のロバート）は征服王と呼ばれることになるノルマンディー公ウィリアムの長男だった。公には三人の息子がおり、次男は「赤ら顔の」ウィリアム、三男は「学者の」ヘンリーと言った。ウィリアム公がヘイスティングスの戦いに向かう時、長男ロベールは先祖代々の領地を守るべくノルマンディーに残り、次男ウィリアムと三男ヘンリーは父に従ってブリテン島に渡った。史実ではこの時ウィリアムは僅か十歳でヘンリーはまだ生まれていず、ここからの話は俗間で喜ばれる講談話に類した本からの再話で、専門の学者には叱られる所ばかりだが、所詮は幽霊に関わる話だから遠慮しないで続けて行く。

ロベールは純情な熱血漢で、坊ちゃん的な性格だった。父ウィリアムはイングランドを征服した後その経営に熱中して、故国をロベールに任せきり、滅多に帰省することもなかった。同じノルマン貴族でも、イングランドに渡った

はみ出し者連中は征服地を好き勝手に切り取って富み栄えるのに、ノルマンディーに残った本家の主たちは狭い所領を発展させる余地がなくて貧しいままである。不満の高じた貴族たちが征服王ウィリアムに対して反乱を企てれば、その頭目に担ぎ上げられるのは御曹司ロベールの他になかった。反乱は手もなく鎮められたのだが、父の征服王はこんな息子が可愛かったようで、別に罰を与えた様子もなく、ノルマンディー公の地位はそのままだった。

征服王ウィリアムが死んだ後、イングランドの王位は次男の「赤ら顔の」ウィリアムが継いだ。ノルマン貴族らにとって、イングランドは分家でノルマンディーが本家なのだから、誰もこの相続に文句はなかった。ロベールは豪放磊落な弟ウィリアムと仲が良く、しばしばイングランドの宮廷を訪れて、二人で狩場に駒を進めながら、もし二人のどちらかが世継ぎのないまま死ぬようなら、世継ぎがある方の長男にノルマンディーとイングランドの両方を継がせよう、などと陽気に話し合っていた。冷飯を喰っている「学者の」ヘンリーがどんな気持ちで聞いていたかを想像するのは難しくない。ヘンリーの暗い憤懣を知ってか知らずにか、兄たちは書物に耽るヘンリーを軟弱と罵り、武芸の苦手な弟を意気地なしと嘲笑った。ヘンリーの心はいつか歪んで、兄たちの中を裂こうと秘かな策略をもてあそび、それが露見して一層兄たちに軽蔑された。

1095年にローマ教皇ウルバヌスが十字軍遠征を呼びかけるとロベールは真先に参加した。軍資金の調達にはノルマンディーの領土を抵当に弟のウィリアムから借金した。コンスタンティノープル入城に際しては、第一軍のゴドフロワ、第二軍のボエモンといった名だたる豪傑たちと肩を並べ、ロベールは別動隊を指揮していた。ニケア攻城の後でシリアに向かう行軍の途中、トリラエウムでイスラム教徒の急襲に遭って苦戦を強いられた時、ロベールの旗印がノルマンの名誉を守り抜いた。アンチオキアの籠城では、猛将クルブカが率いるトルコ軍に囲まれた乱戦で、ロベールは第三軍の采配を振るっていた。そして十字軍随一の勇将と目されたボエモンが領土欲に目が眩み、占拠したアンチオキアを私物化してそれ以上の進攻を拒んだ時も、ロベールは「高潔な」ゴドフロワとともに聖地イエルサレムを目指して進軍した。イエルサレム攻城に当たっては、ロベールは大手のダマスクス門を攻め、入城後にエジプト軍の逆襲に遭うと自ら敵の旗手を斃している。念願の聖地がキリスト教徒のものになり、主将ゴドフロワがイエルサレム王として戴冠すると、ロベールは何の儲けもないまままで満足してノルマンディーに引き上げた。恐らくロベール・クルトユーズ

は、全く欲得抜きで十字軍に加わった唯一の武将だった。

故国に帰ったロベールには思わぬ報せが待っていた。弟のイングランド王ウィリアムが急死して、日陰者のヘンリーが王座に登ったという。ウィリアムは狩猟の最中に、どこからとも知れず飛んで来た流れ矢に当って死に、ヘンリーには明白なアリバイがあったのだが、昔も今も彼の陰謀を疑う人が多い。陰險なヘンリーのことだから、ロベールがイングランド王に渡した借金の証文を盾に取り、ノルマンディーの地を要求するのは目に見えている。ロベールとヘンリーの合戦は避けられなかった。

これに先立って抜け目のないヘンリーは、サクソン王朝最後の正統の王だった「懺悔王」エドワードの姪の娘マティルダを妃に迎える事でサクソン人の歓心を買ひ、イングランド王として土着の住民の支持を得る事に成功していた。だから十字軍帰りで人にも金にも事欠くロベールの軍と、ノルマンディーに押し渡ったヘンリーの軍が激突した1106年のタンシュブレー（Tenchebrai）の戦いには、貴族の兄弟喧嘩というよりも、四十年前のヘイスティングスの戦いの、イングランドの復讐戦という趣があった。ロベールは一敗地にまみれて捕虜となり、流石に血族殺しの大罪は犯しかねる「学者の」ヘンリーは、兄をブリテンに護送して幽閉した。ロベールは各地をたらい回しされた後、1126年にカーディフ城に送られ、塔の牢獄で八年後に死んだ。

中世のロマンスに描かれるように、また獅子心王リチャードが実行したように、ロベールも吟遊詩人に歌いかけて自分の窮状を外に伝え、脱出の手助けを求めることがあったかも知れない。カーディフの白衣の美女の幽霊は、失敗に終わった脱出の手引きをして、ヘンリー王に処刑された官女だろうか。それともイェルサレム遠征の苦しい旅を共にした、情愛こまやかな奥方なのだろうか。それにしても幽霊が歩いて消えるというクイーン・ストリートとその西の大通りは、十九世紀もかなり進み、カーディフがウェールズの炭坑から掘り出される石炭を世界に向けて送り出す港湾都市になりかけた頃に出来たもので、産業革命以前のカーディフは人家もまばらな寒村だった。スタインベックが世に出した最初の小説 *Cup of Gold* はウェールズ出身の海賊ヘンリー・モーガンの生涯を描いたものだが、作中で十七世紀のカーディフが異国の船乗りたちで賑わう光景は、この作家にしては不用意な時代錯誤だったと思う。現在の大通りに沿う「城壁」は、当地の大地主だったビュート侯爵が、ノルマンの砦を取り込んで十九世紀に作った館の屋敷の壁で、短袴公ロベールの時代には存在し

なかった。白衣の女の幽霊はビュート侯爵の不倫相手で、捨てられて当てつけに自殺した女とでも考えた方が辻褄が合うのかも知れない。

＊

カーディフから西に進んで、この国第二位の人口を誇る都市スウォンジーを過ぎると、高速道路に乗らなければ風景が次第に鄙びて来て、ウェールズが本物になった感じがする。鉄道や汽船のなかった昔は、このあたりの陸路には、泊り客が金持に見えれば咽を切って財布を奪い、その死体を床下に埋めて並べる旅籠が散在し、また海辺には嵐の夜の岩浜で座礁した帆船の乗組員を住民が棒で打ち殺し、積み荷を運んで分配する漁村が方々にあった。それらにまつわる幽霊話の数は多いが、ほとんどは犠牲者の同工異曲の「恨めしや」で面白くない。異色のある話では、ディラン・トマスに歌われたファーン・ヒル農場に昔あった家の、自分が吊った罪人たちの怨霊に責められて自殺した死刑執行人の幽霊と、キドウェリー城を廻る牧草地で、斬首されて失った自分の頭蓋を探して歩く中世の女戦士グエンシエンの幽霊がいるが、ずっと以前にこの紀要に書いたから飛ばしてもっと西へ行く。

カーディガン湾に臨むダヴェド州の地形は概して、高い台地が海へと急降下し、平野と呼べるような所がほとんどない。台地には奥へ行くほど細く深くなる谷が刻まれて、危なっかしい断崖がところどころで凹む所に小さな村が点在する。カーディガン湾の水蒸気はたびたび濃密な霧となって溪谷を底伝いに這い登り、白い羊の大群が押し寄せたかと疑わせる。話の舞台になるアベルホウイも、深い谷を見下ろす崖の上の村で、時は前世期の前半だった。

年老いたデイヴィッド・ボウエンとその妻は、生涯をアベルホウイで暮らして来た。彼らにはグインヴォルという一人息子がおり、カーディフの大学を卒業してバプテリスト教会の聖職に就くことになっていた。両親はグインヴォルを唯一の生き甲斐にして、その学業を村中に吹聴することが彼らの至福の楽しみだった。これは日本の親たちが名門大学に合格し息子や息女を自慢するのと少し中身が違う。ウェールズではドルイド僧のいた昔からごく最近まで、人の心を導く職種に並外れた尊敬が払われた。ウェールズの親が子供に望むのは、できればその子が説教師か学校の先生になる事だった。だからウェールズ人は教育熱心で、この国が極貧の状態だった十八世紀にあってさえ、草の根に広まっ

た巡回学校運動が成果を上げ、識字率の高さはヨーロッパ第一位を誇っていた。ウェールズ大学のアベラストウィス校は、炭坑夫や羊飼いや小作百姓たちのペニー単位の献金で創立された。

そんな国柄だから、ボウエン夫妻が息子を自慢するのに不思議はないし、その自慢話に鼻をつまむ人もいなかった。爪に火をともして学資をやりくりした甲斐はあった。息子から来た手紙には、いよいよ叙任式を迎えるので、当日の式場にはぜひ両親に列席して貰いたく、ついでには最近自動車を買った友人がいるので、その友人の運転で迎えに行き、そちらに一泊して四人でカーディフに向かおうと書いてあった。

ボウエン夫妻は胸をときめかせて待った。僻地に住む彼らは自動車などまだ実際に見たこともなく、車と言えば錆の廻った自転車だった。立派な息子と自動車に乗って、大学と聖堂のある首都へ旅をする、その嬉しさを夫妻はまた村じゅうで繰り返し、村人もそれを喜んで聞いた。

だがその旅は実現しなかった。息子とその友人が乗った車は、カーディガン湾から忍び寄った夜霧に道を見失い、ボウエン夫妻の家からほんの僅か離れた地点で断崖を谷底へ転落して炎上した。息子も友人も即死した。その事故から一年半の後、生きる意志を失った父親は憔悴の果てにこの世を去り、残された母親は家売り払ってブレコンにいる妹の許に身を寄せた。

事件から二十年を経た1956年のこと、この古民家をイングランドの実業家夫妻が買い取って、夏の別荘にして滞在していた。彼らには医大に在学する娘がいて、夏休みを両親と一緒に過ごすため、車でアベルハウイへ行くからと、その日時を電報で知らせて来た。到着の日になると朝から霧が出て次第に濃さを増し、約束の時刻が過ぎて陽が沈んでも娘が姿を現さないで、親の不安は募る一方だった。心配が不吉な想像に変わりかけた時、外で車の停まる音がして娘の明るい声がはじけた。この霧の中をよく無事にと喜ぶ両親に、娘はこんな話をした。

幹線道路をそれて谷の道に入るとたちまち見通しが悪くなりミルクの海に沈んだようで、その場に車を乗り捨てて歩いて行こうとまで考えた。ふと前を見るとヘッドライトの光の輪に自転車に乗った老人の姿がおぼろに浮かび、後輪の反射ガラスが赤く光っている。このあたりの道を熟知した地元の住人らしいから後を追えば村に着けるだろうと、接近して超徐行について来たのだが、ふっと姿が消えてしまった。それで仕方なく車を停めると丁度この家の前だった。

アベルホウイの霧の山道で自転車の老人に助けられたのは、この娘が最初でも最後でもないという。デイヴィド・オウエンの幽霊は、この世で自分と同じ嘆きをする親が一人でも少なくなるようにと、今でも霧深い夜には自転車のペダルを踏んでいる。ヘイズル・ルッカーという主婦が1972年に報告したとして、ポケット版ペーパーバックのウェールズ奇談集に入っていたのだが、本そのものは私が昔のパキスタン航空で帰国中、それを入れたスーツケースと一緒に紛失された。

アベルホウイという地名は、手に入る限りの地図には見当たらない。ガイドブックの類にも載っていない。「ぼつんと一軒家」みたいな場所だから当然かも知れず、その事だけで話が創作だとは決めつけられないが、良く出来過ぎた話だとは思う。

＊

カーディガン湾に面したウェールズの、南北の真中あたりに標高892メートルのカーデル・イドリス山がある。北から見ると巨大な肘掛け椅子の形をして、内陸の山地から独立した剛毅な姿を誇っている。リチャード・ウィルソンの絵で有名だが、このウェールズ人画家とカーデル・イドリスを廻っては、これも昔この紀要に書いたから省略する。

カーデル・イドリスの南側の中腹からは、細い溪流が湧いてディブラスと呼ばれる滝になり、分かれて落ちる幾筋もの水が岩を打つ。その響きが滝を挟む複雑な岩壁にこだまして、遠くで聞くと誰かの嘸り泣きのようにも聞こえる。土地の人々はこの音の主を白髪の子イシャ (Illa) の幽霊だと言い、音そのものを「イシャの溜め息」と呼んでいた。

イシャの由来を尋ねると、話はブリトン人とサクソン人が争っていた七世紀まで遡る。当時ブリテン島は早魃に襲われて疫病が流行し、安らかには暮らせない状況だった。ブリトン人のウェールズ王カドワラドルは、血のつながりがあるブルターニュ王アランを頼って一族郎党とともに海峡を越え、しばらく異国の宮廷に難を避けた。アラン王は大掛かりな食客の団体を良くもてなして安穏な日々が続くうち、かつてはあの紅龍の旗を翻してサクソン人との戦いに勇名をはせたカドワラドル王も、次第に甲冑や剣戟を疎ましく思うようになりかけた。

やがてウェールズから来た便りでは、疫病もようやく収まったが、入れ違いにまたサクソン人が攻め込んで、ブリトン人を苦しめているという。カドワラドル王は故国から連れて来た家臣に加え、アラン王から兵士を借りて軍を編成し、海峡を渡る潮時を待っていた。

ところが出港の間際になって空に天使が姿を現し、カドワラドル王に向かって直ちに武器を捨てローマへ巡礼の旅に出よと言う。篤信の王も流石にこれには悩んだが、アラン王に相談すると、サクソン人討伐の戦なら自分が責任をもって差配するから心を安んじてローマへ参られよと勧める。カドワラドル王はその友情を喜んで後事を全てアラン王に託し、巡礼の杖一本を友として一人ローマへ旅立った。その後の王はローマで高德の修道僧になり、その地で清らかに生涯を閉じたという。人々は今もこの王の名前の後に、ウェールズ語で「至福の」という意味の言葉を添えて、カドワラドル・ベンディガイドと呼んでいる。

カドワラドル王にはイドワルという名の息子がおり、ブルターニュの宮廷に残っていた。本来ならこのイドワルが父を代理してサクソン人を討ちに行くべきだが、美青年イドワルは柔弱な性質で戦の大將などになりたくない。その上彼はアラン王の娘イシャと恋仲で、一刻たりともブルターニュを出る気はなかった。一方イシャの兄のイヴォールは覇気満々の若者で、自分の力を世に示す絶好の機会とばかりに、父アラン王に願い出てサクソン人討伐軍の司令官に収まると、軍船を連ねて意気揚々とウェールズを目指し出港した。

ブルターニュではアラン王に庇護されて、イシャとイドワルは愛し愛されながら日を重ねた。ある日ブルターニュの港に一艘の船が着き、カドワラドル王の忠実な家来だった老戦士カドヴァンが、疲れ果てた面持ちの部下数十名と共に下船して、慌しくアラン王の宮廷に向かった。カドヴァンはアラン王に法外な報せを伝えた。ウェールズではサクソン征討軍を率いたイヴォールが国の王位を僭称し、征討どころかサクソン人と手を組んで、ウェールズ人の土地を武力で奪い、自分の支配圏を広げていると言う。老戦士は本来の王子イドワルの足を抱き、何とぞ立ってウェールズに押し渡り、心ある旧臣たちを糾合し、カドワラドルの紅龍の旗の許、イヴォールと一戦交えて頂きたいと訴えた。

ブルターニュのアラン王はこれを知り、自分の息子の非行を悲しんで、老戦士カドヴァンに心からの詫びを重ねたが、娘イシャとイドワルの仲を知っているので、もしイドワルが戦いに行かずブルターニュに留まってくれるなら、イ

シャと正式に結婚させて末はブルターニュの王位を継がせようと提案した。イドワルはイシャ共々大喜びで承諾し、ウェールズに帰って戦う気配など全く見せない。これがサクソン人を震撼させた紅龍カドワドル王の御嫡男かと、悲嘆に暮れる老戦士カドヴァンも列席する中で、イシャとイドワルは目出度く華燭の典を挙げた。

それから七か月が経って、イシャの胎にはイドワルの子が宿っていた。ブルターニュに留まって無為の日々を送るしかなかった老戦士カドヴァンは、諦めきれずに今一度イドワルを説得に赴いた。「王子様、故国にお戻り下され。貴方は英雄の血筋ではありませんか。諸王の王の種ではありませんか。我らの父祖の地に帰り、戦に猛きその民を統べて下され。聞けばお妃イシャ様は王子の御子を身ごもっておいでとの事。ウェールズ王家の御子がこの世で最初に目にする太陽が、異国の太陽であって良いものか、そこをとくとお考え下され。皺首賭けてのお願いでございます。ウェールズへ、我らがカムリの地へ、何卒何卒お戻り下され。」

イドワルは老戦士の熱誠を持って余して、妃が何とか丸めてくれないかと期待した。だが今日のイシャは様子が違った。その青い両眼に硫黄の火を燃やし、優柔不断な夫に激しい励ましを叩きつけた。「さあ立って、お父上の名に背かない貴男の姿を見せて下さい。異国の宮廷で安逸を貪るのをやめて、貴男自身の手でもって、貴男の息子の頭に正当な王冠を載せてやって下さい。貴男がイシャを愛するなら、イシャの頭に貴方の国の女王冠をかぶせて下さい。イドワルが治めるべき国はウェールズです。すぐに軍を整えましょう。もし貴男が行かないと仰有るなら、私イシャが軍を導きます。」

老戦士カドヴァンは狂喜してイシャの足に口づけした。こう言われては仕方なく、イドワルは馴れぬ甲冑を身に纏い、カドヴァンの部下とブルターニュ人の義勇軍を率いてイシャと共にウェールズをさし出陣した。

カドヴァンの采配が巧みだったのか、イドワルに隠れた天分があったのか、彼らの戦は連戦連勝で、たちまちイヴォールを窮地に追い込んだ。だが敗走するイヴォールが毒を投げ入れた泉の水を飲んだため、イドワルはあえなく急死して意気阻喪した兵士らは四散した。イシャは忠義なカドヴァンとただ二人カーデル・イドリス山に隠れ住み、そこで息子のロドリを生んだ。

歳月は流れ、ロドリは健やかに成長した。老雄カドヴァンに武芸百般を仕込まれ、山の鳥獣を追いながら育ったこの若い偉丈夫がイシャの唯一の希望だっ

た。悲しみと苦しみ of 十数年に、イシャの髪の毛は真っ白になっていたが、ブルターニュを出る時に夫を励ました、あの激しい野心の火は消えていなかった。そんなある日、イヴォール王はカーデル・イドリスのあたりで狩をして、たまたま一人で隠れ処を出ていたイシャに遭い、それと気付かずこの白髪の女に水を一杯所望した。

イシャは兄を憶えていた。咄嗟の反応は身をひるがえして逃げようとする事だけだった。その白髪女の背中に向かい、イヴォールは声を荒げて怒鳴りつけた。「無礼者、予が何者か知らぬのか。」

「知らいでか」とイシャは振り向きざま、激情に駆られて怒鳴り返した。「お前はブルターニュのアランの子、ウェールズ王を僭称する卑劣漢、正統の王イドワルを毒殺した篡奪者イヴォールだ。王座を横領した裏切り者だ。犯罪者だ。私はお前を軽蔑する。憎んでやる。呪ってやる。」

激怒したイヴォールは剣を抜き、即座に白髪女を刺し殺した。カドヴァンが現れるのが一瞬遅かった。「早まり召さるな。それなるは妹御ですぞ。ブルターニュのイシャ姫ですぞ。」

イヴォールが覗き込む血の気の失せた顔には、幼い日々を父母の許で共に過ごした妹の面影が紛れもなかった。懐旧の悲哀と肉親殺しの大罪に圧倒され、イヴォールの頭脳は壊れた。あらぬことを口走りながらその場をよろめき去ったイヴォールは、獣のように山野を駆け回り、やがて行方が知れなくなった。母を葬った美青年ロドリはカドヴァンの手引きで公の場に現れ、ウェールズの正統の王として民衆の万雷の歓呼に迎えられたという。

ウェールズで十三世紀に書かれた歴史書には、681年にカドワラドル王がローマで歿し、その後をブルターニュ王アランの子イヴォールが継いで720年まで位にあり、更にその後をイドワルの子ロドリが750年まで治めたと書いてある。ウェールズで最も古い年代記 *Annales Cambriae* では、カドワラドル王は682年に、「ブリテン島を襲った疫病で」死んだとあり、ローマ巡礼の話は後世になって、恐らくは同名の、別人の事績を取って付けた物らしい。いずれにしてもこれらの年代をきちんとイシャの物語に当てはめるのは難しい。またイシャという女性の名は、ウェールズ語でもブルトン語でも他に聞いたことがなく、「イシャの溜め息」という言い回しを知っている人にも出くわさない。六十年以上も昔に神田で買った、表紙もタイトルページもとれた古本で読んだ話で、十九世紀末あたりの好事家の創作ではないかと思わせるが、土産物店に

並んでいるペーパーバックの「ウェールズ伝説集」などにまるまる転載されていたりもする。つまり本そのものが幽霊じみている。

＊

カーデル・イドリスから北に進んで、「純正ウェールズ」(Pura Gwalia)とも呼ばれる北東部に入れば奇談怪談の宝庫だが、規定字数を超えそうなのでもう一つだけ、北の海辺の城下町コンウィで拾った話を記しておく。

二十世紀の中頃までは確かに、コンウィにはプラス・マウル(大屋敷)と呼ばれる屋敷があった。町全体が城壁で囲まれて、城の塔からかなり離れた西の住宅地の一角の、小さな通りに面して薔薇の植わった小庭があり、その奥にテューダー様式の三階建ての館があった。エリザベス一世女王の治世の中頃に、当地の豪族ウィン家のロバートが建てたという。このプラス・マウルは幽霊屋敷だった。

「だった」は英語なら大過去を使う所で、そう言うのには少々わけがある。この館は早くウィン家の手を離れて持主が変わっていたのだが、二階のランタンの間という部屋には何かと怪異の気があった。好奇心や勇猛心からこの部屋に一泊を試みる者は、夜中になると言うに言われぬ嫌な恐怖に襲われて、館が強力な悪霊に憑かれているに違いないと言った。だが誰にも悪霊の素性は分らなかった。やっと二十世紀の初めになって、医学関係の古文書から館で起った事件についての記録が発掘され、去るに去られぬ霊たちのかつての所業が明らかになった。

十六世紀も終わり方のある夕暮れ、プラス・マウルの奥方は三歳になる我が子(男女の別は伝わらない)を抱いて、館の屋上にある見張りの塔に立っていた。夫は外国へ戦に出てもう半年も家を留守にし、帰国を予定された日を過ぎてもまだ何の便りも届かなかった。ひょっとすると夫は、シェイクスピアの芝居に出るフルエリンのモデルになったウェールズ人の勇将ロージャー・ウィリアムズの軍に加わって、オランダかポルトガルで戦ったかも知れない。テューダー王朝時代はイングランドでウェールズ人が、そして特に軍人が、一番幅を利かせた時代だった。何しろ女王様のお祖父さんがウェールズ人だった。ロージャー・ウィリアムズが1593年に大陸から凱旋すると、ロンドン市民は熱狂的な歓呼で迎え、市中でお祭り騒ぎが繰り広げられた。プラス・マウルの館の

主は、そんなロンドンに心ならずも足止めされたのかも知れない。すでに二番目の子を身籠っている奥方は、来る日も来る日も見張りの塔に登り、コンウィの入江に夫の旗印を靡かす船が入るのを待っていた。

プラス・マウルに限らずテューダー時代の建築では、階段が恐ろしく狭くて険しい。十一月の夕暮れに、幼児を抱いた身重の奥方が、夫の帰りを諦めて暗い階段を降りかかり、足を踏み外しても不思議はない。幼児もろとも転落した奥方の叫びに家政婦が駆けつけると、ひどく打ち所が悪かったらしく、奥方も子供も打撲と骨折で呻吟していた。家政婦はともかくも二人をランタンの間に担ぎ下ろしてベッドに寝かせ、かかりつけの医者と呼ばびにやった。医者は一通りの応急処置を施して、容態は極めて重篤だから決して目を離さず、少しでも変化があったらすぐに自分と呼ぶようにと言い置いて、ひとまずは自宅に引き上げた。

真夜中に奥方の様子が怪しくなり、家政婦は直ちに医者に使いを送った。ところが医者は他の急患に往診中で、ディックという名の若い代診がやって来た。ディックは医術専門学校を優等で卒業したばかりの気さくで愛想の良い好青年だったが、何分実地の経験が乏しい上、生まれつきの小心者だった。患者の様子を一目見ると、ディックは事態の由々しさに動揺した。幼児はすでに危篤に陥り、母親は複雑骨折の身に落下の衝撃で産気づき、激しい苦痛で呻いている。とても自分の手に負えないから、大先生と呼ばびに行くと言って立ちかけた。家政婦は大慌てで、今あなたに放っておかれては困る、大先生なら庭番と呼ばびに行かせるから、付き添って出来る事ことをして下さいと必死で頼み、浮足立つディックを逃すまいと、ランタンの間の扉に鍵をかけて閉じ込めた。

家政婦にせかされ庭番は館を飛び出したが、ついで医者の家には行き着かなかった。プラス・マウルの門を最後に、庭番は雲隠れして行方が知れず、コンウィの町から消えてしまった。五十年以上も経ったある日、港に入った異国の船の老水夫が身の上話をして、若かった頃自分はこの町で、とある屋敷の庭番をしていたが、ある夜家政婦の命令で夜中に医者と呼ばびに行く途中、海賊の群れに拉致され、彼らにこき使われて海の仕事の修行をし、長い船員暮らしを経て来たと言った。プラス・マウルで何があったのか、住人がどんな様子だったのか、老水夫は全く知らなかった。海賊に限らず水夫などという命懸けの荒仕事に従事する人間を募るには、昔は随分乱暴な事をしたもので、英国海軍では長く強制徴募隊（press gang）を編成して、体格の良い若者を有無を言わず

攫って行った。あのネルソン提督でさえ、青年士官だった頃にはプレスギャングの指揮をした。

話を戻して館では、やきもきしながら医者を待つ家政婦が、ふとランタンの間の不気味な静けさに気が付いた。不吉な予感に血の凍る思いで、扉越しに代診のディックを呼んでも返事がない。奥方の名を呼んでも反応がない。決心して扉の鍵は開けたけれど、家政婦には室内を見る気力が失せていた。外では遠くで雷が鳴っていた。突然、階下の大広間に慌しい足音がして、遅すぎた医者の到着かと家政婦が一瞬思う暇もなく、プラス・マウルの館の主人が、妻の喜ぶ顔を見ようと駆け上がって来た。

踊り場で蒼ざめて震えている家政婦など、館の主人の目には入らなかった。彼は勢いよくランタンの間の扉を押し開け、中に一歩足を踏み入れた。戦場でむごたらしい物を見慣れた主人にも、この場の光景は格別だった。窓辺の寝椅子には幼児の死体が横たわり、ベッドでは妻が息絶えて、マントルピースには死産の嬰兒が置いてある。「誰がこんな事を」と辛うじて声を絞る主人に向かって、咽び泣く家政婦は「ディック先生が看て下さっている筈なのに」と嘆くだけだった。主人は剣を抜いて怒号した。「出てこいディック、藪医者野郎、復讐だ、貴様を叩き切ってやる。」

だがディック医師は消えていた。たった今まで外から鍵のかかった密室で、逃げ出る隙はなかったのに、不運な若い代診の姿はランタンの間のどこにもなかった。家政婦は主人の激昂に新たな危険を感じ取り、剣を納めてともかくは御休息をと必死で宥めたが、主人は彼女を扉の外に押し出して、ランタンの間に閉じ籠った。戸外で次第に激しくなる雷にも勝る主人の痛ましい絶叫と、狂おしく室内を歩き廻る足音が長く続いたが、明け方近くふっと止んだ。脳卒中でも起こしたのか、文字通り悲しみに心臓が破れたのか、夜が明けて恐る恐るランタンの間を覗いた家政婦は、妻のベッドの脇の床上で既にこと切れた主人を含む、家族四人の亡骸を見た。

ディック医師はその後も二度と姿を現さなかった。人々の推論では、この小心な若者は自分が到底処置できない状況で患者が次々に死ぬのに恐れをなし、逃げ場を探して暖炉の煙突に潜り込んだという事だった。各階各室の暖炉から出る煙の通路が、複雑に錯綜して屋上の煙出しに登るテューダー建築の煙突の真っ暗な迷路を迷ううち、体力消耗と酸素不足で哀れなディックは死んでしまった。プラス・マウルの壁の中には、煤だらけのミイラになったディック

が蹲っていて、雷の鳴る夜には出口を求めて泣き叫ぶ。そしてランタンの間の方では、館の主人が足音を轟かす。いつか館が壊されてディックの骨が発見され、館の主人の墓の傍に葬られて和解のミサが挙げられるまで、プラス・マウルの怪異は止まない。そんな話が二十世紀の中頃までは続いていた。

1976年に私がコンウィを訪れた時、プラス・マウルのランタンの間には等身大のディックの蠟人形が立っていて、あまりコミカルな顔をしているので反って気味が悪かった。館の入り口に赤ら顔の老人が机を出して「幽霊話付き案内書・15ペンス」というのを売っていた。「かみさんに読んで聞かせるなら、雷の鳴る晩がベストだよ」と言う。「幽霊は本当に出るのか」と訊ねると「間違いない」と答えて、実際に見た人の話を二つ三つしてくれた。「あんた自身は見たか」と訊くと、「わたしや臆病な年寄で、話を聞くだけで震えるから、心臓に障るような冒険は努めて控えている」と笑った。

その二十年後、私はコンウィを再訪する機会に恵まれて、プラス・マウルを探したが見付からなかった。多分ここと思った場所には、重機が入って整地していた。ディックの骨が出たかどうかは知る由もない。今世紀では個人の幽霊が出る場所が世界の至る所で消えて行く。そして幽霊にもなれない死者の集団を記念してコンクリートのオブジェが建つ。

コンウィから東へ進むと国境に近いリズランの古城に物凄い幽霊が出る。これも昔の紀要に書いたから省略してウェールズを離れる。

*

私は幽霊を見たことがない。見たことのある人は大勢知っていて、その人たちが嘘つきだとは思わない。去年読んだ物の中に、化石人類の頭蓋骨の内側を調べて脳の発達の段階を追う趣旨の本（E.Fuller Torrey, *Evolving Brains Emerging Gods*, 2017）があった。自己認識や自伝的記憶と言った脳の諸能力が可能になる度に、それらを司る部位が出来て脳が僅かずつ大きくなり、農耕文明が起った時、前頭葉に神を想う部位が生まれたと言う。私は前頭葉のどこかに幽霊を見る能力の部位もあり、そこが発達している人が巫女やシャーマンになるのだが、自分はまだその部位が十分に発達してないのだと思っている。